



第2図 (a) 1991年4月27日の海面水温。等値線間隔は 0.5°C 。
(b) 1991年4月27日の海面水温平年偏差。等値線間隔は 0.5°C 。

ず、サイクロンの発生が予報できているが、その位置は

セイロン島付近にあった実況に比べ $1,000\text{ km}$ 以上離れている。現在気象庁では月に3回15日予報を実施している。そのうちの17日12 UTを初期値とした288時間(12日)予報にもサイクロンの発生が表現できている。

4日以上も前からこのサイクロンの発生を予報できた原因の一つは海面水温にあると思われる。20日頃からセイロン島東沖に暖水域が出現していた。暖水域は次第に暖まりながらその領域は北に広がった。第2図は27日の海面水温(a)とその平年偏差(b)を示している。海面水温は(15°N , 82°E)付近にて 31.4°C 、平年偏差で 3.4°C に達した。台風やサイクロンの発生条件として $26\sim 27^{\circ}\text{C}$ 以上の海面水温が必要であると言われている。この暖水によって大気下層が暖められ、対流が活発になってサイクロンの発生発達につながったと思われる。

月例会「長期予報と大気大循環」プログラム

本誌6月号でお知らせしました月例会「長期予報と大気大循環」のプログラムが、下記のように決まりましたのでお知らせします。なお、会場は当初気象庁第1会議室を予定しておりましたが、やむを得ない事情で東京管区気象台会議室に変更になりましたので、ご注意下さい。なお、プログラム終了後に懇親会を予定しております。

記

1. 日 時：1991年10月1日(火) 13:30~17:30
2. 場 所：気象庁東京管区気象台会議室(8F)
3. プログラム
 - セッション1
 - 座長 二階堂義信(気象研・気候)
 - 13:30~14:15 中緯度大気の40日振動
 - 木本 昌秀(気象庁・数値)
 - 14:15~15:00 熱帯熱源による熱帯—中緯度間相互作用
 - 伊藤 久徳(和歌山大・教育)
 - 15:00~15:45 永続する1月の条件でのAGCM 長期間積分に現れる

テレコネクションパターン
佐藤 康雄, 千葉 長,
柴田 清孝(気象研・気候),
木田 秀次(気象研・応用)

休憩

セッション2

座長 増田 耕一(東大・理)

16:00~16:45 インド/オーストラリア・モンスーンの年々変動

鬼頭 昭雄(気象研・気候)

16:45~17:30 ユーラシアと北米大陸における多雪年に対する海面水温度変動の関係について

岩崎 友彦(幹日本総研総合研究本部)

4. 問い合わせ先：〒100 東京都千代田区大手町1-3-4
気象庁予報部長期予報課
露木 義
TEL. 03-3212-8341(内線 3157)